

54 加藤土師萌《葱文大皿》

一点

昭和五年（一九三〇） 陶磁
径四一・三、高六・八

アール・デコ様式の典型を直線や曲線を多用した幾何学的な図様表現に求めるならば、この加藤土師萌による大皿はその規範からやや外れ、自由になることができた作品である。たしかに陽刻で表された葱の葉や茎は直線を意識した形状であるが、加藤はあえてその形状を暈かすかのようにその上から緑釉をたつぷりと掛け、背景の黄味のあるクリーム色の釉葉と融け合わせて斑状に結晶化させている。それによって、図案の明瞭な輪郭をわざと釉葉で滲ませて暈かしている。このような結晶釉の作例は二十世紀初期からすでに西洋を中心に試みられていたが、加藤は結晶釉と陽刻文様を組み合わせることで、さらに新しい境地を目指していた。本作は昭和五年の第十一回帝国美術院展覧会に出品されて秩父宮雍仁親王の御買上となり、雍仁親王の薨去後、同勢津子妃より親王御遺愛の品として昭和天皇へ献上された。

加藤土師萌（一九〇〇～六八）は瀬戸出身の陶芸家で、岐阜県陶磁器試験場の技手を経て、横浜に日吉窯を築窯して独立した。その間には帝展への連続出品を通じて瀬戸美濃地方を代表する陶芸家としての地位を築き上げており、その作品も中国を始めとした古陶磁研究だけでなく、輸出振興のための産業工芸研究を通じて幅広い知識を敷衍して構築されたものであった。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ ― 光と影の造型美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 70

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan